

いやあ～・・・ほんまに坂井先生は工工事書くわあ～・・・と感心します。さすがです。この仕事をしていると、発達検査の結果などを良く目にします。しかし普段関わってる子ども達の様子と大きく違う点がある事に気付く事があります。だからといって、「そんなアホなあ～・・・」とはなりません。「あ、そういう一面も持ってるんだな」とその情報を関わりの中に取り入れて考える様にします。すると、さらに違った一面を見せてくれる事もしばしば・・・人と関わる仕事で「これしか絶対にダメ！」なんて事は絶対に無い筈ですもんね。頭を柔らかく、話の中にも出てくる「謙虚な気持ち」これに付きますね。

坂井先生はあんなに凄いのにいつもこの感じを出しています・・・僕もあんな風になりたいっすねえ・・・憧れます。 久田

第25回 『わかるように伝えていませんか』

香川大学 坂井 聰

必要な情報としての発達検査 は

前回、必要な支援と適切な 教育ということをテーマにして話をしてきました。必要な支援を考えるときに、保護者が資料として発達検査の結果をもってくることがよくあります。発達検査には多くの場合所見が書かれしており、指導の方向性などもそこには書かれていることも多いのではないかでしょうか。

ところで、現場でそれらの結果はどのように支援に反映させていけばいいのでしょうか。つまり、それをどのように現場で活かせばいいのかということです。毎日接している子どもの情報が、全く違う側面から捉えられている結果などを見る事もあり、その時だけの発達検査の結果で、子どもの全てがわかるわけはないのにと感じている人もいるのではないかと思います。

常に意識しておかなければならぬのは、様々な機関で行われた発達検査は、参考資料としてももちろん活用するのですが、その結果が、その子どもの発達の状態全てを表しているのではないということです。発達検査の結果は、その子どもの一側面を表しているにすぎないということなのです。検査の結果から考えると、この子には無理だろうと思われることでも、その子が課題を簡単にクリアしていく様子を見ることは、教師なら誰でも経験することです。つまり、子どもの発達の実態というのは、教師が日頃子どもとの間で行っているやりとりに最も現れているということなのです。

しかし、ちょっと振り返って考えてみましょう。毎日その子どもに接している人は、その子どもがどんなところで困るのかということを関わりの中で知り、それについて無意識に配慮していることがあります。つまり、その時点で必要な支援をしているということなのです。よく職人芸というようなことをいいますが、そこにはその人の熟練したスキルが反映されているということなのです。このような場合は、子どもの発達検査のプロフィールと、学校等での生活実態は必ずしも一致していないということになります。このようなときに役立つのが、インフォーマルな評価である日頃の指導記録や連絡帳に書かれている事柄です。そこには、子どもの発達の実態と、それを促すために行った支援や指導が反映されているからです。それを見なおしてみると、無意識のうちに行っていた必要な支援と指導が明らかになり、次のステップにつながっていることがわかるはずです。もちろん、発達検査の結果には、指導方針や指導方法、教材等を考える上で必要な情報が含まれています。ですから、それらを参考にすることは大切ではあるのです。しかし、だからといって、教育の場は、発達検査の結果だけに縛られてしまうものではないということなのです。

発達検査の結果から離れて、インフォーマルな評価から子どもの実態を明らかにしてみる。そのうえで、発達検査の結果を見てみる。そして、実際に行なっていた必要な支援と指導について謙虚に振り返り、支援や指導に修正を加えていく。そのようにするならば、発達検査の結果は、あなたの指導を縛ってしまうものではないということに気がつくはずです。

坂井聰先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里） クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会） 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など